

水環境・生物多様性保全計画進行管理表													資料 2－2	
取組み の柱	施策の方向性	指標名	現状値 (2021年度)	目標値 (2032年度※1)	指標に係る補足	(参考)2022年度	2023年度							
						実績値	実績値	2023年度（直近）の状況等	考察（改善・悪化要因）	課題	評価※5			
											進捗度	得点	配点	得点率
水環境の 保全活用	水環境・水循環の理 解の促進	水環境や水循環につ いて理解している市 民の割合	水環境：40.8% 水循環：42.7% （※2）	100%	市民へのWEBアン ケート	水環境：40.8% 水循環：42.7% （※2）	水環境：48.3% 水循環：54.3%	前年度から、水環境は7.5ポイン ト、水循環は11.6ポイント改善し た。	本市における啓発等の効果に加え、温暖化に伴う 気候の激甚化に関する報道等による、世の中全体 の関心の高まりが数値の改善に寄与した可能性が 考えられる。	目標達成に向けて、継続的な啓発活動の実施が必要 である。	C			
	豊かな水辺（河川、 海岸、湧水地など） の保全・創出	多自然護岸整備河川 等の延長※3	13,644m (2019年度)	17,449m (2029年度)	※千葉市環境基本 計画と同一指標	13,711m	13,831m	二級河川支川都川において、 L=120mの河道築造工事を行った。	二級河川支川都川においては、大規模な地盤改良 工事の完了に伴い、2023年度から河道築造工事に 着手した。今後も下流から上流に向かって河道築 造工事が進めていく。	想定以上に地盤が軟弱であったり湧水等がある箇所 も見受けられるため、現場条件に応じた適切な対処 が必要となる。	C			
	きれいな水（水質） の保全	水質環境目標値（生 活環境項目）達成率	61.1% （※4）	100%	※千葉市環境基本 計画と同一指標	76.7%	73.3%	目標値である100%には到達せず未 達成。内訳として、 ・河川…大腸菌数 ・海域…COD、全窒素、全りん、 底層DO が達成しておらず、未達成の要因 となっている。	[河川] 大腸菌に関する指標については旧計画時から未達 成が続いているが、明確な原因は分かっていな い。2023年度の水環境・生物多様性保全計画の策 定に伴い、指標が「大腸菌群数」から「大腸菌 数」へと変更になった。 [海域] 東京湾の水質は、長期的に見て緩やかな改善傾向 にあるが、陸域からの汚濁負荷流入により窒素や リンなどの栄養塩類濃度は未だ高い状態である。 また、底質の貧酸素化も課題となっている。この ような状況であるため、年間で数日、赤潮や青潮 が発生している。	[河川] 未達成の要因である大腸菌について、2023年度から 指標が「大腸菌数」に変更となったことから継続的 なモニタリング等や河川の通日調査等を通じて状況 を把握していくことが必要。 [海域] 環境目標値の達成を図るためには、内陸部から流入 する汚濁を削減する必要がある。また、海域の水質 汚濁については広域的な課題であることから周辺自 治体と連携して対策することが必要。	B	14	25	56%
	水資源の持続可能な 利用	単年度沈下量2cm未 満の地点数の割合	100%	100%	※千葉市環境基本 計画と同一指標	100%	100%	2012年度以降、2cm以上の沈下は観 測されていない。	千葉市環境保全条例等による地盤沈下対策が適切 に実行されている。	今後も揚水規制を継続するとともに、定点調査で現 況を確認していくことが重要。	S			
	地域の水辺とふれあ う機会の創出	自然観察会等の参加 者数・開催数※3	92人 5回	2,450人 140回	※千葉市環境基本 計画と同一指標（目 標値が異なる）	253人 13回	230人 12回	参加者は前年度より約1割減少し た。雨天中止となった回数が増加 した分、開催回数が減となった。	当日欠席者が多く、定員を大きく下回る回があっ た。	当日欠席者への対策として、一定の当日参加者数を 確保するための対策が必要。	C			
生物多様 性の保全 再生	生物多様性・生態系 の理解の促進	生物多様性について 理解している市民の 割合	55.0%※2	100%	市民へのWEBアン ケート ※千葉市環境基本 計画と同一指標	55.0%	57.8%	前年度より2.8ポイント改善した。	本市における啓発等の効果に加え、世界的な潮流 として生物多様性の重要性が高まっているため、 これらが数値の改善に寄与したと考えられる。	市民の生物多様性への理解を高めるため、普及啓発 に係る施策のさらなる拡充が必要。	C			
	豊かな緑（水源林、 谷津田など）の保 全・創出	谷津田の保全協定締 結面積	61.89ha	80.17ha		61.68ha	63.82ha	前年度から2.14ha増加し、「千葉 市基本計画 第1次実施計画」上の 目標（年2ha）を超えて拡大して おり、目標値達成に向け順調に推移 している。	地権者の合意が得られた2地区において保全協定 を追加締結した。	さらなる保全区域の拡大のため、地権者との継続的 な交渉が必要である。	C			
	貴重な動植物の保護 及び外来生物対策	貴重な生物（ヘイケ ボタル、ニホンアカ ガエル）の生息数	1,632匹 2,089個	増加	ヘイケボタル （匹）、ニホンアカ ガエル（卵塊数 （個））3地点の合計 ※千葉市環境基本 計画と同一指標	1,609匹 2,032個	1,440匹 1,644個	ヘイケボタルは約1割、ニホンアカ ガエルは約2割、それぞれ前年度よ りも減少した。	生息量は天候等の影響により年度によって増減が あるため、モニタリング及び生息の場の保全・維 持を継続していくことが重要と考えている。	調査に協力しているボランティアが高齢化してい るため、調査人員の育成・発掘が必要である。	D	8	30	27%
		特定外来生物（哺乳 類）の防除数※3	176頭	2,350頭	アライグマやキョ ンなどの防除数 ※千葉市環境基本 計画と同一指標（目 標値が異なる）	316頭	398頭	・前年度より約25%増加した。 ・捕獲実績が年々増加しているこ とから、生息数、生息域ともに拡 大していると思われる。	・農政部による若葉区での集中捕獲事業の実施が 捕獲数の増加に大きく寄与した。 ・耕作放棄地等、管理の行き届かなくなった土地 が増加していることが原因と思われる。	・集中捕獲事業分を除いた捕獲数についても高止ま りしており、引き続き捕獲を強化していく必要があ る。 ・耕作放棄地や山林を刈払うなど、鳥獣を引き寄せ ないような対策を地域ぐるみで取り組み、「鳥獣の すみにくい環境管理」が必要と考える。	C			
	生物多様性がもたら ず資源の持続可能な 利用	家庭系食品ロス量	3,824 t （10.7g/人・日）	2,900 t （8.3g/人・日）		3,592 t	4,686 t	例年減少傾向がみられていたが、 2023年度は前年度よりも約1,100 ト ンの増加となった。	コロナ禍の自粛が明け、経済活動等が活発化する 中で、食品ロスへの意識が希薄となっていた可能 性が考えられる。	食品ロス削減を身近な問題として市民に意識しても らえるよう啓発を行っていく。 食品ロスを減らすためのひと手間をどこまで行っ てもらえるか、必要性を伝えることも課題。	D			
	地域の自然とふれあ う機会の創出	（再掲）自然観察会 等の参加者数・開催 数※3	92人 5回	2,450人 140回	（再掲）	253人 13回	230人 12回	参加者は前年度より約1割減少し た。雨天中止となった回数が増加 した分、開催回数が減となった。	当日欠席者が多く、定員を大きく下回る回があっ た。	当日欠席者への対策として、一定の当日参加者数を 確保するための対策が必要。	C			
計画の推 進体制の 整備	人材の確保・育成	ボランティア育成講 座の受講者数・開催 数※3	17人 1回	1,200人 60回		75人 5回	72人 6回	開催回数は計画どおりだが、参加 人数が目標値へのトレンドに対し 下回って推移している。	当日欠席者が多く、定員を大きく下回る回があっ た。	当日欠席者への対策として、一定の当日参加者数を 確保するための対策が必要。 また、講座受講後、実際に保全活動に移行する方が 少ないため、保全活動団体と連携し、受け入れに繋 げていくことが必要。	C			
	ボランティア等の活 動支援	地域環境保全自主活 動事業補助金の交付 団体数※3	1団体	30団体		0団体	0団体	2022年度以降、利用されていない ことから、利用の促進を図る必要 がある。	補助要件に千葉市民活動センターへの登録がある ことや、あくまで補助で団体側の持ち出しがある ことが利用が少ない理由だと考えられる。	新たな団体に向けた周知と利用しやすい制度の構築	D	4	15	27%
	市と市民等によるモ ニタリング体制の整 備	貴重な生物（ヘイケ ボタル、ニホンアカ ガエル等）のモニタ リング地点数	3地点	14地点	ボランティア団体 等による調査	4地点	4地点	・大草（ニホンアカガエル・ヘイケボタル） ・金光院（ニホンアカガエル・ヘイケボタル） ・坂月川ビオトープ （ニホンアカガエル・ヘイケボタル） ・小倉（ニホンアカガエル）	モニタリング実施ポイントとして、小倉地区を追 加した。	・モニタリング調査を担う市民団体等の発掘、連携 ・貴重な生き物が生息している地点の把握	C			

※1 一部目標年度が異なるものがある。 ※2 2023年4月に実施 ※3 計画期間中の累計値 ※4 計画に記載の数値（67%）が誤っていたため正しい数値に修正

※5 評価について

環境基本計画の評価方法を参考に、指標ごとに次により進捗度の評価（S・A・B・C・D）を行い、得点をS…5点、A…4点、B…3点、C…2点、D…0点、配点を取組みの柱ごとの指標数×5とし、得点/配点で得点率を算出した。

- ・目標が数値で設定されている場合 現状値・目標値に対して当該年度の実績値がどの位置にあるかにより評価を行う。S…目標値以上、A…現状値+差分の60%以上～目標値未満、B…現状値+差分の30%以上～60%未満、C…現状値+差分の0%以上～30%未満、D…現状値未満
- ・目標が現状値からの増加（又は現状値・目標値ともに100%）として設定されている場合 現状値を上回った（維持した）時点で「S」、現状値以下（未満）だった場合は「D」とする。